



# 息づく仮面

——バリ島の  
仮面舞踊劇トペン  
と音楽——

2015年12月6日(日)

公演 第1部	1
第2部 仮面舞踊劇トペン	1
出演者紹介	3
舞台裏	5
ワークショップ	7
バリの仮面文化	8
バリでの上演	14

解説 吉田ゆか子〔東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所(開催当時:国立民族学博物館)〕



国立民族学博物館

## 公演 第1部



### オープニング

歓迎のガムラン演奏(ババパン・スリシール)と開会の辞。



### 歓迎の踊り

バリの祭りの余興や様々な式典で初めに踊られることが多い舞踊パニヤン・ブラマの上演です。



### 戦士の踊り

現在バリの男性舞踊の代表的な演目となっているバリスの上演です。

## 公演 第2部 仮面舞踊劇トペン

バリ島の隣のペニダ島で悪さをする暴君ブンクット王を、バリ島のスグニン王の家臣ジェランティックが倒すまでの物語。上演を字幕付きで紹介します。なお、トペンでは、バリの人々の母語であるバリ語のほか、古いジャワ語やサンスクリット語のセリフ、そして物語とは関係のない歌詞なども挿入されます。今回はそういったバリ語以外の部分や歌詞の翻訳を省略しています。

### 1.トペン・クラス 力強い大臣



### 2.トペン・トゥア 老人



3. 徒者(兄弟)の兄弟(プナサールとウイジル)



4. スグニン王(バリの王様)



5. スグニン王の家臣、ジェランティック



6. ジェランティックにお供し、  
ペニダ島へ向かう  
バリ島の村人たち(道化)



7. 大臣ジェランティックと  
ブンクット王の対決



8. ブンクット王の最後



## 出演者紹介



イ・クトゥット・コディ



コディさんは、トペンの第一人者であり、影絵ワヤンや歌舞劇アルジャでも演者として活躍しています。歴史や神話など文学に増資が深く、バリの芸能家たちから尊敬をあつめているうえ、滑稽で親しみ深い芸風で観客からの人気を博してもいます。芸能研究者でもあり、インドネシア国立芸術大学デンパサール校で教鞭をとっています。コディさんの生まれたシンガパドゥ村(desa Singapadu)は、仮面職人が多いことでも知られます。コディさんの父、故イ・ワヤン・タングー(I Wayan Tanggu)さんは、バリ島を代表する仮面職人でした。みんなのバロンとランダは、このタングーさんやその弟子たちによって作られたものです。

コディさんは、仮面の優れた作り手としても知られています。優れた仮面職人は、仮面舞踊を習得しているべきであり、また優れた仮面舞踊家は仮面作りにも精通しているべきであると言われます。両方の分野で活躍するコディさんは、現在のバリの仮面芸能を牽引する存在であるといえます。

コディさんはもともと、イ・クトゥット・スウェチャさんというトペン演者とコンビを組んで、上演してきました。文学に造詣が深く、踊りや歌にも長けた二人のコンビは、バリ島のトペン演者たちのなかでも、1、2を争う人気のグループでした。二人は、バリ島の様々な地域に招待され、忙しく上演活動をしていました。

数年前にスウェチャさんがお亡くなりになりました。それ以降、コディさんは、スウェチャさんの息子であるデドさんに色々教えながら、新たな相方を育てています。デドさんは、色々な舞踊や演奏で既に活躍していた芸能家ですが、スウェチャさんから直接仮面舞踊劇トペンを習うことはあまりなかったそうです。

日本滞在中も、コディさんは暇を見つけては、「お父さんの踊りはこうだった」「こんな動きをしていた」といったことをデドさんに伝えていました。トペンでは、特に上級者になればなるほど、それぞれの演者の特色あるスタイルをもっています。コディさんは、スウェチャさんのスタイルを引き継いで欲しいと思っているようです。





## イ・マデ・マハルディカ（デド）

演劇、舞踊からガムラン演奏まで幅広いジャンルをこなす才能豊かな芸能家です。バリではマハルディカの名よりも、デド(Dedo)という愛称で知られています。デドさんのお父さんはトペニの名手で知られた故イ・クトゥット・スウェチャ(I Ketut Suweca)さん。現在は、父の芸をうけつぐべく、トペニでも活躍を見せていました。今回の来日では、トペニ演者としての出演のみならず、伴奏音楽の指導も行いました。

デドさんの出身村は、コディさんの出身村であるシンガパドゥの隣、バトゥ・ブラン村(desa Batubulan)です。この村は、聖獣バロンと魔女ランダの戦いを演じるバロン・ダンスで有名であり、デドさんはこのバロンの踊りの第一人者でもあります。



## ギータ・クンチャナ + バパン・サリ

ギータ・クンチャナは、大阪在住の小林江美さんにより、1994年に結成されたバリ・ガムランの演奏グループです。今回は、西日本で活躍するもう一つのグループ、バパン・サリから世良さん、藤本さん、瓜生さんの3名を迎えて、特別編成で演奏しました。メンバーの多くが、バリ島でガムランを学んだ経験をもっています。

小林江美／瓜生和子／山海一剛／須谷朗／世良真紀／藤本民子／松村涼子／水沼優子／吉田ゆか子



## 佐味千珠子 佐々木みゆき 中野愛子 松坂真生子

バリで舞踊を学びつつ、日本の関東や関西を中心に活動を展開する舞踊家たちです。今回は、神戸でバリ舞踊グループ、マニック・クスマを主宰する佐味千珠子の呼びかけによって集まりました。それぞれ、バリでの芸術祭出演や、寺院での舞踊奉納、日本国内での公演やイベントへの参加も活発に行っています。



## 舞台裏の紹介 演奏者と舞踊家の打ち合わせ

### バリでの打ち合わせ



伴奏のガムラン音楽では、太鼓奏者がリーダーとなり、他の演奏者たちをリードします。太鼓を担当する小林江美さんは、日本での公演に先立ち、バリでデドさんの家を訪れて打ち合わせました。トペンの伴奏曲は、日本でも広く知られていますが、実際には、バリで演奏されている曲には、色々なバリエーションがあります。どのバージョンを使うか、また演者から奏者たちへの合図はどのように出されるのか、などを確認しました。

## リハーサル



公演3日前に日本へやってきたデドさんは、「バリで打ち合わせた時に、伝え忘れた一曲がある」と言い出しました。企画者の吉田は「本番まで2回しか練習がないのに大丈夫だろうか」と心配になりましたが、デドさんは「もう一曲増やしたいといったら江美（太鼓奏者）は驚くだろうな」などと言いながらニヤニヤしています。そしてデドさんは「これでこそ芸術（seni）だよね。芸術はこうでなくては」と楽しそうに言いました。準備が万全で、演奏者達が安心しきっているようではおもしろくないのだそうです。演奏者たちは、困難があるほど「もえる」ということでしょう。また、実際バリでは、特に即興性の高いトペンのようなジャンルの上演に際して、きちっとリハーサルすることの方が稀で、本番まで何が起こるかわからない部分が残るという傾向もあります。全部をあらかじめ万全に準備するよりも、緊張感をもって練習や本番にのぞみ、本番に起きることを楽しむ。本番直前の曲の追加という小さな事件は、そのようなバリらしい本番観や芸能家精神を浮かび上がらせる契機となりました。

## 上演前後の供物



トペンの上演前には、上演の成功を願って舞台と伴奏楽器、そして仮面にも供物がささげられます。供物にお香を添え、聖水を撒き、祈ります。これは、仮面に神格を招待する、あるいは仮面の中にいる神格を呼び起こすプロセスでもあります。トペンが儀礼とは関係なく上演される場合、このようなプロセスは必須ではないのですが、ほとんどの場合、それでも何かしらの供物をささげます。また、トペンの終了の後には、同じように供物をささげ、祈ります。上演の成功に感謝し、仮面に宿る神格にお帰りいただく、あるいは眠りについていただくためです。研究公演でも、観客の方々がいなくなった後、舞台上で仮面を前に、コディさんが供物をささげ、祈りました。

## ワークショップの様子

公演の前日に、ワークショップを開催しました。舞踊に用いられる基本動作の解説、踊りのデモンストレーション、そして舞踊体験が行われました。デモンストレーションでは、舞台衣装や、仮面をつけずに踊ってもらい、身体の動きがよく見えるようにしました。



### トペン・クラス

トペンの一番最初に踊られる、強い大臣の舞。



### バリス

戦士の舞。トペンとは別のジャンルの男性舞踊。多くの男児が最初にならう演目です。



### トペン・トゥア

通常トペン・クラスの次に登場する、老人の舞。



### トペン・ダラム

トペンの中盤に登場する王の舞。

## バリの仮面文化

写真撮影：吉田ゆか子



トペンが儀礼で上演されるとき、供物が用意されます。これはその一部です。供物は、米、果物、卵、鶏肉などの食物や花や椰子の葉や古銭などで作られています。最後に装着するシダカルヤの面が右の台の上に置かれています。（2015年撮影）



周年祭をむかえている寺院の正面入り口。デドさんの出身村でもある、バトゥブラン村に位置する、この寺の中でトペンが行われました。（2015年撮影）



コディさんによるトペン上演。左側の赤い帯をした女性たちは、婦人会のユニフォームを着ています。彼女達は婦人会活動の合間にこのトペンを眺めています。(2015年撮影)



コディさんによるトペン上演。後半部の道化のシーン。(2015年撮影)



仮面の神聖化儀礼パスパティが行われた際の祭壇。中央にシダカルヤの仮面が置かれています。  
(2008年撮影)



シダカルヤの仮面と頭飾りを神聖化する司祭。背後には、新しくトペン演者となった、男性がいます。  
この後その男性自身も身体を浄化する儀礼プウインタナンを受けました。(2008年撮影)



仮面を作るコディさん。右足の上に乗っているのは、見本にしている仮面。このように、バリの仮面のほとんどは、既にある仮面を（部分的にあるいは全体的に）手本にしながら作られます。（2013年撮影）



コディさんの弟のマデさん。コディさんと同じ敷地に住んでいて、仮面職人として活躍しています。写真は老人役の仮面に、コーティング剤を塗っているところです。（2007年撮影）



ガルンガンとクニンガンは、バリの重要な祭日。その二つの祭日のあいだの期間、子供達は、村内の家々を回って、仮面の踊りを披露します。(2006年撮影)



家の前で、バロンの踊りを披露しているところ。家の人たちは御札に、供物として小額の紙幣を子供達に渡します。単純なメロディを繰り返す伴奏にあわせて自由に踊る素朴なものがですが、子供の頃からこうやって仮面に親しんでゆきます。(2006年撮影)



同じく、バロンの踊りの門付けに参加した子供。被っているのは猿の仮面です。(2006年撮影)

## バリでのトペン上演の様子 民博での上演との若干の違いについて



バリでは、トペンは結婚式、葬式、寺院祭などの儀礼で上演されます。そういった儀礼で上演されるトペンには、今回のみんぱく研究公演といいくつか違う点があります。主なものを以下に挙げます。

- 上演場所：バリではトペンは基本的に、儀礼会場の片隅で上演されます。寺院のほか、浜辺、仮埋葬場、民家などさまざまな場所が会場となります。
- 活気ある上演空間：司祭の儀礼執行と並行してトペンが上演されます。供物をもった参拝客が往来し、歌や人形劇などさまざまな芸能が上演されるなか、そして司祭の鐘の音や人々の喋り声が響くなかトペンが上演されます。
- 観客の態度：観客は、この上演を見に集るわけではありません。人々は儀礼にやってきて、たまたまトペンに遭遇します。そのため、トペンには目もくれず、隣で友人とのおしゃべりに興じる人もいます。ただし、トペン上演が盛り上がりてくると、その人たちが上演に引き込まれることもあります。トペンの初めから終わりまでを熱心に観劇する人は少なく、人々は気が向いたときに、時折目をやり耳を傾けます。
- 上演時間：30分から一時間程度となります。司祭の儀礼執行と同時に始まり、同時に終わる必要があります。トペン演者は、儀礼が終わる頃合いを見計らって、物語を切り上げ、最後の仮面シダカルヤを登場させます。
- シダカルヤの登場：シダは成功、カルヤは儀礼を表す語です。シダカルヤは、儀礼で上演されるトペンの最後に必ず登場します。シダカルヤによって、その儀礼が成就するともいわれます。一方で、シダカルヤは儀礼以外では登場させてはならないとされてもいます。今回の研究公演でも、このシダカルヤは登場させませんでした。ただし、ダラム・ドゥクットに用いた仮面は、通常はシダカルヤ役が用いるタイプのものです。

### 参考文献

トペンについてさらに知りたい方は以下の本をご覧ください。  
吉田ゆか子（2016）『バリ島仮面舞踊劇の人類学－人とモノの織りなす芸能』風響社。